

中途視覚障害者の学習方法

植 田 喜 久 子

〔抄録〕

中途視覚障害者を考慮した生涯学習社会構築への提言を行う目的で学習方法について半構成的面接調査を行った。障害者は多様な学習を行っていたが、職業的自立には新たな学習が必要であり、緊急必要性の高い学習課題を有していた。障害者にとって学習は生涯にわたる発達の保障でありリハビリテーションであるため、人間の可能性を障害があることで限定しないことやその人らしく生きるための学習を可能とする社会が求められる。

キーワード 中途視覚障害者、学習方法、リハビリテーション、生涯学習社会の構築

1. 問題の所在

学習方法は、学習目的を達成するためのやり方であり、生涯を通して家庭、学校、社会のあらゆるところで行われ、学習要求や学習目的、学習内容、学習形態を内包するものとして位置づけられる。また、哲学事典によれば、方法論とは「ある目的を遂げるためのはからい、すなわちその手段、道具、それを実施する順序、それらの工夫、その技などのすべてのこと」である⁽¹⁾。

国際的な生涯学習の流れは、すべての人に対する教育上の差別や不均等をなくすことである。1985（昭和60）年、第4回ユネスコ国際成人教育会議における学習権宣言によれば、学習権とは、「読み書く権利」であり「探求し分析する権利」であり「想像し、創造する権利」であり「自分自身の世界を解し歴史を著す権利」であり「教育資源を手に入れ利用する権利」であり「個人や集団の技量を高める権利」である⁽²⁾。また、学習権は「人類の生存のために欠くことができない道具であり、人類の発達を促すものである」と述べている⁽²⁾。

一方、わが国においては、1990（平成2）年、「生涯学習の振興のための施策の推進体制等

の整備に関する法律」いわゆる生涯学習振興整備法が成立し、全国的な政策としての生涯学習推進体制づくりが行われている。「日本においては、国民の生涯にわたる学習権の保障をめざすものでありながら、生涯学習の中央集権化と企業による教育、文化・学習の営利事業化の推進が基本にある」と述べている⁽⁹⁾ように、公民館などの公共団体が生涯学習のプログラムを決定し、住民が参加するという学習方法が多いように思える。

中途視覚障害者とは、5歳くらいまで正常な視覚による生活を体験した後、事故や疾病などが原因で視覚障害者になった人であるが、障害者の実態は明らかでなく、障害者の生涯学習に関する文献はみあたらない。また、成人期は、人間の発達の成熟した段階であり安定かつ不変と考えられていたが、実際はそうではなく、むしろ責任ある変化のある時期である。このような時期に失明を体験した人間が、今後どのように生きていくかを自分自身で決定できるほど失明後のリハビリテーションに関する学習を行ってはいない。さらに、わが国における中途視覚障害者は増加傾向にあるが、リハビリテーション体制は充実していない。

そこで、障害者を考慮した生涯学習社会構築のための基礎資料を得ることを目的として、中途視覚障害者の学習方法の現状を明らかにし考察する。

2. 研究方法

- 1) 調査対象：在宅の中途視覚障害者50名（以下障害者と称する）。
- 2) 調査日時：平成8年7月29日～8月13日
- 3) 調査・分析方法：まず、中途視覚障害者へ墨字（印刷文字）による調査依頼文を郵送した。その後、筆者が電話を行い、本人から直接調査の協力を得た後、質問用紙を用いて電話による半構成的面接調査を行った。面接時間は30分から60分。

3. 対象者の概要

障害者50名。男性44%（22名）、女性56%（28名）。最低年齢25歳、最高年齢75歳、平均年齢は、54.98歳（SD＝11.46）。年齢20～39歳が8%（4名）、40～59歳が44%（22名）、60歳以上が48%（24名）。

視覚障害の原因となった疾患は、眼底の疾患が60%、眼圧の異常が14%、視神経・視路および水晶体の疾患が各々8%、外傷が6%、ぶどう膜の疾患が4%であった。身体障害者手帳取得者のうち1・2級が90%であった。

有職者が14名であり、職種は、三療（按摩・マッサージ・指圧師、鍼師、灸師）従事者、社会福祉協議会職員や守衛などサービス業、公務員や教員、販売業、製造加工業であった。

日常生活活動については、全員が、食事行動、排泄行動、入浴行動、衣服の着脱行動、自宅

内の移動については、一人で行っていた。

4. 結果および考察

A. 現在行っている学習方法

1) 学習行動率（学習を行っている人の比率）について

学習を行っていると答えた者は92%，行っていない者は8%であった。性別では、男性は86%，女性は96%が学習を行っていた。年齢別に学習行動率をみると、20～40歳未満が100%，40歳～60歳未満が86%，60歳以上が96%であった。障害者の学習行動率は高く、男女差も少ない傾向にあった。

また、NHK放送文化研究所編『日本人の学習 成人の学習ニーズをさぐる』によれば、学習行動率は1982年40%，1985年50%，1988年45%であった。『世論調査報告書 平成4年2月調査 生涯学習に関する世論調査』によれば、学習行動率は、総数48%，男性47%，女性48%であった。この結果と比較すると、障害者の学習率は高い。この理由として、調査対象者のうち無職者が72%であり、余暇時間が多いことや有職者の学習率が高いことが考えられる。

2) 学習目的

学習目的としては、「好きだから」「人と交流したいから」が各々59%，「自立がしたいから」が54%，「能力の向上をめざす」が39%，「生活に必要なだから」が26%であった（複数回答）。性別で比較すると、男性は「将来活かしたい」「資格を得たい」「収入を得たい」という目的が多く、女性は「好きだから」「人と交流をしたい」「生活に必要なだから」という目的が多い。男性は、資格を得て職業を持つことや現在の職業の遂行能力を高めていこうというものであり、手段型学習を志向しており、女性は、外出し、何かを行うことやいろいろな人と会話を行うことも目的としており表現型学習を志向していた。

中途視覚障害者の学習目的は、知識や技術を身につけたい、資格を得たい、考え方や行動の仕方を変えたい、仲間づくりをしたい、時間を有効に使いたい、不安の緩和のために何かをしたい、と考えられる。成人期にある障害者は、職業をもちたい、現在の職業の知識を深めたいという学習目的を持ち、健常者と同様な発達課題といえる。さらに障害者の学習は、日常生活活動能力を高め、他者との交流が可能となり、生活に必要な活動である。

3) 学習内容

学習内容として障害者が実際に行っていると自覚している学習内容を明きらかにした。得られたデータを「家庭生活に必要な知識・技術」「職業生活に必要な知識・技術」「社会人としての教養」「個人としての教養」「保健・体育」「趣味・芸術活動」「視覚障害」の7つのカテゴリーに分類した。現在実行している学習について、「趣味・芸術活動」は85%，「視覚障害」は52%，「個人としての教養」が22%，「職業生活に必要な知識・技術」は13%，「社会人として

の教養」「保健・体育」が各々9%、「家庭生活に必要な知識・技術」が7%であった(複数回答)。性別では、男性は「趣味・芸術活動」が53%、「視覚障害」が37%、「職業生活に必要な知識・技術」が32%、「個人としての教養」が21%、「社会人としての教養」が21%、「家庭生活に必要な知識・技術」や「保健・体育」が各々5%であった(複数回答)。女性は「趣味・芸術活動」が103%、「視覚障害」が59%、「個人としての教養」が22%、「保健・体育」が11%、「家庭生活に必要な知識・技術」が7%、「社会人としての教養」が4%、「職業生活に必要な知識・技術」はなしであった(複数回答)。

『世論調査報告書 平成4年調査 生涯学習に関する世論調査』によると、学習内容は、「保健・体育」「趣味・芸術活動」「職業生活に必要な知識・技術」「家庭生活に必要な知識・技術」の順であり、男性は「保健・体育」「職業生活に必要な知識・技術」「社会人としての教養」が多く、女性は「趣味・芸術活動」「家庭生活に必要な知識・技術」が多い。障害者も同様な傾向を示しており、男女共に視覚障害に関することが多い。視覚障害に関する学習は、未知の学習であると同時に、自分自身を知ることでもあり、生きる世界を拡大する役割があるといえる。

表1 実行している学習内容(項目別)

学習領域	男性(人数)	女性(人数)
家庭生活に必要な知識・技術	パン作り(1)	料理(2)
職業生活に必要な知識・技術	三療(3)翻訳(1)職能団体の活動(1)勤務(学校)上の講習会(1)	なし
社会人としての教養	ラジオやテープから社会情勢(2)政治・経済の本(2)	ラジオやテープから社会情勢(1)
個人としての教養	読書(2)漢字(1)老人大学(1)	読書(4)漢字(1)カウンセリング(1)
保健・体育	デューサービス(1)	ケアサービス(1)水泳(1)デューサービス(1)
趣味・芸術活動	民謡(2)川柳(2)詩吟(1)フルート(1)茶道(1)天文学(1)コーラス(1)	民謡(4)カラオケ(5)コーラス(2)詩吟(2)ソーシャルダンス(2)謡(1)日本舞踊(1)川柳(1)華道(1)ピアノ(1)三味線(1)短歌会(1)大正琴(1)銭太鼓(1)園芸(1)絵画や書の鑑賞(1)琴(1)
視覚障害	障害者の会(3)障害者の会の運営(2)点字訓練(2)	障害者の会(10)盲人ワープロ(2)障害者の会の運営(1)福祉情報(1)社協の活動(1)ライトハウスでの訓練(1)点字訓練(1)

(n=46, 男性19名, 女性27名, 複数回答)

学習内容を具体的にみると民謡・カラオケなど残存感覚である聴覚を活用したり、視覚障害に関する学習が多い(表1参照)。また、趣味・芸術活動は、障害者が健常者と一緒に学習しやすいといえる。なかには、ソーシャルダンス、絵画や書の鑑賞、園芸を行っている者もいた。「楽しい。踊る時は、夫以外の人と踊るのよ。健康にもいい」「子供が展示場で絵の説明をする。人の一生が1枚の絵になっており感動した。目がみえないからわからないと思ったらだめ。人間は、環境に身を置くことが大切」「いろいろな野菜をつくる。紐をつなぐから、位置がわかる」と述べた。障害者は、視覚障害を理由に何もできないと決めつけるのではなく、まず行ってみるということが重要である。学習は上手に行うことや学習の成果のみが目的ではない。人間が感覚を活かして学ぶことが重要である。

4) 学習場所・学習時間・学習形態

学習の場所については、家庭外が78%、家庭内が37%であり(複数回答)、主に公民館や社会福祉協議会など公共施設であった。理由として、費用が安い、自宅から近い⁽¹⁾ため外出が比較的容易、友人がいるからである。

学習時間については、午後が59%、午前が33%、いつでもが30%、夕方以降が15%、休日が2%であった(複数回答)。性別でみると男性も女性も、午後が各々53%、63%と最も多い。ほとんどの者が、午前か午後の昼間に行っていた。また、有職者は、夕方か休日に学習を行っていた。家事を担っている女性や視力障害のために夜は外出しにくいといえる。

学習グループについては、健常者で行っている者が58%、障害者のみで行っている者が26%、1人・家族で行っている者が35%であった(複数回答)。

性別でみると、健常者と学習している者は、男性42%、女性70%であり、女性が男性よりも健常者と学習している傾向があった。健常者と学習を行っている者が多いのは、学習場所が公民館など公共施設であることや障害者に「目のみえる人と交流したい」という希望があるからである。また、趣味・芸術活動が多く、障害者が健常者とともに学習しやすいとも考える。集団学習の利点として、情報の入手や交換がしやすい、学習の動機づけがしやすい、感情の浄化作用や仲間意識の形成が比較的容易である、学習者相互の援助により技術を身につけやすい、理解や認識を深化できる、社会的態度の形成に役立つ、態度変容や意志決定にも参加できる、共同実践へ進むことも可能となると指摘されている。障害者となり、自分自身に適した学習を選択していく際、自己の学習能力を活用して参加できるものを選択していた。また、健常者とともに⁽⁴⁾行う学習活動に参加していることは、ノーマライゼーションの観点からも好ましいといえよう。

B. 学習の実行能力

1) 文字の読解方法と学習

文字を自分自身で読解可能と答えた者は68% (34名) であった。文字の読み方は、点字が16名、ルーペや眼鏡が9名、墨字が5名、読書拡大器が4名であった。文字を自分自身で読める者のうち88%、文字を読めない者のうち94%が学習を行っており、文字を読めないことが学習の支障となっていない。

2) 外出方法と学習

外出は、自分自身が視覚障害者であることを社会にさらけ出すことでもあり、リハビリテーション状況を端的にあらわす行動である。外出の頻度は、毎日が48%、週1～2回が26%、週3～4回が20%、ほとんどなしが6%であった。外出の目的としては、買い物や散歩が80%、通院が78%、福祉施設が70%、旅行や行楽が66%、公民館や集会所など社会教育施設が54%、通勤・通学が24%であった (複数回答)。外出の方法として、1人で外出するが66%、介助者と外出が34%であった。年齢別に介助者と外出する者の割合をみると、20～40歳未満がなし、40～60歳未満が23%、60歳以上が50%であり、高齢者になるほど介助者を必要としていた。しかし、1人で外出ができなくても介助者のガイドヘルプにより学習が可能となっている。

外出時の交通手段は、バスが70%、電車が62%、タクシーが66%、JRが50%、自家用車が48%、船8%であった (複数回答)。多くの者が公共の交通機関を利用していた。外出が困難であると回答した者が78%であり、その理由を「点字ブロックと敷石の区別が困難」「歩道と車道の区別が困難」などの道路環境の不備、「車内放送がない」「バスカードを入れる場所がわからない」など交通機関の不備、外出の費用、ガイドヘルパーの不足、他者の対応の不親切さを述べていた。環境の不備による外出の不自由は、学習活動として必要な身体活動を制限する。障害者にとって、外出は単に身体の移動という意味だけではない。洋服を着替え、化粧をする、町の香りや人と出会いや会話のすべてが、リハビリテーションであり、学習そのものである。

3) 生活情報の入手方法と学習

生活情報とは、人間が生活の中で具体的に行為を決定していくための適切な知識であり、学習を情報入手としてとらえることができる。人間にとって情報の80%は視覚を介するために視覚障害による情報入手の不自由は学習の妨げとなる。また、学習活動は、コミュニケーション活動であり、生活に必要な情報を入手し、その情報をもとにして判断し生活行動を決定していく。したがって、情報入手の方法は、障害者の学習方法の状況を知る目安となる。

生活情報の入手方法を口コミ、マスコミ、テープや点字などの出版物に3分類した。口コミでは、友人86%、視覚障害者84%、家族66%、福祉関係者62%、隣人46%、職場関係者26%、医療関係者24%であった (複数回答)。障害者の情報入手の方法は、専門職である医療・福祉関係者よりも友人・家族・視覚障害者など、身近な人が多い。マスコミでは、ラジオ80%、テープの広報68%、テレビ66%、墨字の新聞20%、墨字の広報10%、点字の新聞8%、有線放送8%であり (複数回答)、聴覚を活用した方法である。いつでも聴ける録音テープの内容は

福祉機器の紹介、社会の出来事、新しく出版された本の紹介など、内容も多方面に渡り、視覚障害者向けのミニコミ誌的存在である。障害者であってもテレビから66%が聴覚を活用して情報入手していた。健康に関する番組などは、言葉を聴いているだけで内容がわかる位に説明してほしいと述べていた。多くの人が活用しているテレビ放送のあり方は、生涯学習における学習教材として課題があるといえる。出版物では、障害者の会のテープ70%、録音図書68%、点字図書18%、対面朗読22%であった(複数回答)。対面朗読サービスは、県や市の図書館や点字図書館で行われているが、利用者が少ない。

4) 学習環境

自分自身にとって学習環境があると答えた障害者は、80%であった。視覚障害者は「できないと思わないこと。自分から探すこと」「何事も自分次第だ」「学習の情報は、自分でキャッチするもの」「障害者は勉強しないとだめ。いつもしてもらうことばかりを求めているはみんなが納得しないのよ。今、ここに生きている障害者を考えてもらえるようにならなくてはね。そのためには、学習しかないのよ」と述べた。

学習の実行能力として必要なものは、障害者自身の目的意識であり、学習意欲である。目的意識や意欲は、何が学びたいかを自問自答することから明確になり、学習の場を求めていく原動力となる。

学習行動の有無との関連をみると、学習を実際に行っている者だけが学習環境がないと答えていた。学習を行うことにより、新たな学習要求が生じ、その要求を充足できない学習環境の不備に気づいていくと思われる。一方、学習を行っていない者は、全員学習環境はあると答えていた。さらに学習を行っていない者はその原因を環境ではなく、「目がみえないから」「他人に迷惑がかかるから」と自分自身に原因があると考えていた。

C. 希望する学習について

1) 学習要求率(学習関心率)

学習要求(learning needs)とは、人間が学習することを意識的あるいは無意識的に求めていることである。学習要求は、学習欲求とか学習必要ともいう。NHK放送文化調査研究所編『日本人の学習 成人の学習ニーズをさぐる』における学習関心調査では、学習要求を2つのレベルに分けている。つまり学習要求には、学習の氷山モデルが示すように、すでに学習行動となっているものと意識レベルにとどまっているものがある。また、意識レベルにも、ふだんから意識されていて、行動化の可能性の高い顕在的学習関心と外からの刺激や手がかりが与えられてはじめて意識される潜在的学習関心に分類できる。つまり、学習要求には、学習を明確に必要としている学習要求もあれば、自覚されていない学習要求もある。

学習行動(learning activities)は、学ぶために行う座学や実習であり、実際に表出した行動である。潜在的な学習要求から顕在的な学習要求に変化し、経済的条件や時間的条件等の学習

条件が整備されて学習行動が生じる。学習要求は、学習行動を支えている。

障害者の学習要求率は、総数72％、男性59％、女性82％であった。また、情報入手の方法、文字の読解方法、外出方法、家族の学習観は、学習方法の決定に影響を及ぼしていた一方、学習要求のない者は28％であった。その理由は、「現在行っているから」が57％、「できないと自分で思う」「高齢だから」が各々14％、「失明の不安のために学習する気が起きない」「仕事を行う以上のことはできない。休日は休みたい」「夜の講習に行きたいが暗くて歩行が困難があるから」「華道を習いたいけども目がみえないから」であった。

NHK 放送文化研究所編『日本人の学習 成人の学習ニーズをさぐる』の結果によると、顕在的にせよ潜在的にせよ学習要求率は90％であり、顕在的学習要求率は59％であった。また、『世論調査報告書 平成4年2月調査 生涯学習に関する世論調査』によれば、学習要求のある者は65.9％であり、学習要求のない者は総数28.4％、男性が61.1％、女性が69.8％であり、障害者の学習要求率は高いといえる。

また、実際に学習を行っている者が、学習要求率が高いと言われている。障害者の場合も、学習を行っている者の学習要求率が76％、行っていない者の学習要求率が60％であり、学習を行っている者のほうが高い傾向を示した。この結果は、学習を行うことによって学習課題が明確になり学習要求を増していくと考えられる。

2) 希望する学習内容 (顕在的学習関心)

希望する具体的な学習内容を表2に示す。希望する学習内容は、「視覚障害」が47％、「職業

表2 希望する学習内容<項目別>

学習領域	男性(人数)	女性(人数)
家庭生活に必要な知識・技術	なし	料理(2)
職業生活に必要な知識・技術	東洋医学(1)三療(3)	三療(2)理学療法士(1)電話交換士の職業訓練(1)
社会人としての教養	ボランティア活動(1)	社会情勢や生き方の学習(1)住んでいる町のニュース(1)手話(1)
個人としての教養	漢字(1)学習さがしの学習(1)	世界地図(1)英会話(1)
保健・体育	水泳(1)	水泳(1)スポーツ(1)
趣味・芸術活動	謡(1)カラオケ(1)	演歌(1)太鼓(1)華道(1)エレクトーン(1)
視覚障害	盲人ワープロ(4)墨字(1)ピアカウンセラー(1)福祉サービス(1)	点字訓練(4)盲人ワープロ(2)リハビリテーションセンター(1)墨字(1)

(n = 36, 男性13名, 女性23名, 複数回答)

生活に必要な知識・技術」「趣味・芸術活動」が各々17%、「個人としての教養」や「社会人としての教養」が各々11%、「保健・体育」が8%、「家庭生活に必要な知識・技術」が6%であった(複数回答)。性別では、男性が「視覚障害」が69%、「個人としての教養」「職業生活に必要な知識・技術」「趣味・芸術活動」が各々15%、「社会人としての教養」や「保健・体育」は、各々8%であり、「家庭生活に必要な知識・技術」の希望はなかった(複数回答)。男性は「東洋医学を学び自分自身の職業を科学的に裏付けてみたい」「盲人ワープロを習い、仕事上のカルテ整理に活用したい」と職業的能力を深めるための学習を希望していた。女性は「視覚障害」が35%、「職業生活に必要な知識・技術」「趣味・芸術活動」が各々17%、「社会人としての教養」が13%、「家庭生活に必要な知識・技術」「個人としての教養」「保健・体育」が各々9%であった(複数回答)。

障害者は、趣味・芸術活動のように楽しみの傾向があるものばかりでなく、社会情勢や地域環境についての学習、職業的自立のための学習を希望していた。また、「学習さがしの学習を行いたい」と述べた者がいた。障害者となり、情報を得にくい現在、自分に何ができるのか、何がしたいのかを考える学習こそ、リハビリテーションの第1歩である。また漢字の学習や世界地図で新しい国がどこにあるのか知りたいと回答した者が各々1名いた。理由として「点字で読み書きしていると漢字を忘れてしまい、同音異義語の場合、混乱することがある」「点字の地図はなく、オリンピックに参加している国がどこにあるのか知りたいと思う」と述べた。障害者を取りまく学習環境は、知りたいと思えばすぐに学習できる環境ではない。点字図書や録音図書など学習資源は少なく、学習上の社会的不利が生じている。

D. 「生涯学習」の周知度

生涯学習という言葉聞いたことがある者は、総数78%、男性86%、女性71%であった。年齢別では、20～40歳未満が75%、40～60歳未満が77%、60歳以上が79%であった。『世論調査報告書 平成4年2月調査 生涯学習に関する世論調査』において、性別では、男性が66.1%、女性が63.2%であった。年齢別では、20～30歳代と60歳以上が50%代であり、30～50歳代は60%代であった。障害者は、聞いたことがあると回答した者の割合が高いといえる。

聞いたことがあると回答した者の意見には、「大切なことである」「生きがいのある生活は必要。明日はこれをしようと思ったら励みになるし、張りがある」「一生勉強だと思ってきた。できないと思わないこと、探すこと」「知りたい、覚えたい、見てみたいと言うのは、人間の本能。氣力を失ったら人間の資格を失う」「趣味を持って外出することがいい。おしゃれするし、人と触れ合うから」と述べた。また、障害者は「自分の中に積み上げていくものがほしい。何かないと気が滅入る」「目のみえる人の話が聴きたい」「生きていくために何でも勉強だ」と学習の実践を求めている。しかし、生涯学習の理念や具体的な学習について理解しておらず、自らの生き方を決定していく学習や人間らしく生きる権利の保障としての学習の必要性

を述べる者はいなかった。

5. 結 論

障害者の学習方法の調査結果から、障害者にとっての学習の意義や生涯学習社会への提言を行う。

1) 緊急必要性が高い学習課題

障害者の学習は、緊急必要性が高く、リハビリテーション過程そのものである。生涯学習の緊急必要性の判断は、人間誰しもが体験する可能性のある社会的問題であり、個人の努力で解決できない問題である。リハビリテーションに関する情報を提供できる医療・福祉関係者もいるが、対応できる者は少ない。専門職者によるリハビリテーションに関するアドバイスがないことで、障害者は安全性を優先して家に閉じ込めがちとなる。障害者が失明を受け入れ、その人らしい生きがいのある生活をみいだすために、自分自身の状況やリハビリテーションの方法を知ることから始まる。情報は意味もなく単に蓄積されるのではなく、現在の問題を解決する。障害者は、失明により生じた問題を解決する学習を行う必要がある。

レヴィンソン (Levinson, D.J.) は、生活構造と社会の変化に対応しうる力量の形成の重要性を指摘し、ハッチンス (Hutchins, R.M.) は、「賢く、楽しく、健康に生きることが人生の価値であるような学習社会の形成が未来社会である」と述べた。このような能力の育成や社会を作るために学習課題の具体化が必要であり、とりわけ中途障害者のように失明前と失明後の世界との2つの世界を生きる人々の学習課題は、きわめて緊急必要性の高いといえよう。人間にとって新しい状況がふりかかったときに適切に行動できる能力やなじみのない事象を処理する能力は、革新的な学習 (innovative learning) の内容であり、緊急必要性の高い生涯学習の重要な課題である。障害者が生き永らえるための学習 (survival learning) を行うことによって、心身両面にわたって人間としての尊厳を維持して生活していくことができるといえよう。

医師は、患者に視覚障害が固定し、治療困難であることを説明する。その際、医療従事者が障害者へ具体的なリハビリテーションを紹介することによって、これからの生き方を見いだすことが可能となる。従って、医療従事者は、障害者が自らの生き方を決定していく上で、重要な情報提供者となる。医療従事者は、単に疾患の治療や悪化しないための生活指導を行うのみでなく、障害者にとって生涯学習の提供者として存在する。実際、障害者は、「失明後の生活について、何かあればと思い、福祉事務所や社会福祉協議会に電話で質問しても“何もわからない”“何もありません”としか言われぬ。何もできないまま、時が過ぎるのがこわかった」「病院に入院中、看護婦に食事やトイレの援助をしてもらっていた時、何とかしなければ…どうしたら1人でできるようになるのかと考えていた。日本ライトハウスを紹介してもらった時、すぐに行きたいと思った」と述べていた。障害者は、失明すると何もできなくなったと思

い、絶望の時期を体験する。何もできないと思っていた自分から、1人で食事ができた、料理ができた、外出ができたなど「できた」という体験を持つことが生きる自信となり励みとなっていく。さらに「できた」という自信から新たな学習要求が生じ自己の学習課題が明確になる。

障害者は、現在の視力を悪化させない工夫についての学習、現在の生活をより安全に安楽に生活できる学習、失明するという事態に備えての学習を求めている。このような学習により障害者は、一度しかない人生を生きがいを感じ幸福に生きることができるのである。

2) 先見的学習⁽⁵⁾の必要性

ノーマライゼーションは、その人の持つ自己実現ニーズを尊重して共に生きていく社会を創り出すことである。そのためには、障害者の学習要求や学習環境から考察すると、多様な学習の場・機会の提供を図り、障害者を含む市民の創造活動を援助していくことが必要である。学習活動は、自分自身の器官、感覚、能力を活かすことであり、自分自身の存在感を高めることである。障害者のリハビリテーションに関する学習はもとより健康や福祉上の問題に対する学習は、単に個人的な要求を充足するための学習課題ではなく、すべての人々にとって優先される学習課題である。

また障害者になってはじめて学ぶのではなく、人間が未知の将来に対処する先見的学習(anticipatory learning)として、障害者を学ぶことは、共生社会の形成となり、不確定な未来を適切に洞察する能力を養う。学習は現状を学ぶばかりでなく、未知との遭遇に備える学習も必要である。人生途中で失明した場合、医療機関での治療を終えた後、どのような生き方があるのか、自分自身で判断できるような能力が必要である。自分自身で問題を発見し対処する能力があるならば、失明の危機的状況から、適切な学習方法を見いだして乗り越えていく手段となる。

学習は、自分自身との関わりを通して様々な事実にあい、感動することである。また、学ぶとは単に知識や技術を得るのみでなく、様々な事実や人々との出会いを通して、自らの世界もそしてまわりの世界も豊かにしていくことであり、学習を通して障害者自身の生きる世界が広がり、多様で豊かになっていく。また、障害者が学習の主体者となり、今までの与えられることを中心とした福祉ではなく、健常者も障害者も共に学習を行うことによって、お互いに自己変革を行うことが可能となる。つまり、学習は福祉と教育を統合し、共生社会の形成となる。

3) 障害者が新たな職業をもつこと

障害者が新たな職業を持つためには、学習が必要である。将来何らかの職業を持ちたい、あるいは現在の職業上の知識や技術を深めたいと思っている者が6名いた。ホール(Hall, 社会学者)によれば、「職業(occupation)とは、直接的・間接的に社会的成果および経済的な果実⁽⁶⁾をもたらす社会の成人構成員によって遂行される社会的役割である」と述べている。つま

り、職業は社会的役割の遂行であり社会的成果をもたらす報酬があり生活の経済的基盤である。障害者が残存能力を活用して職業を持つことは、人生や存在に充実感をもたらす。

現在、日本における職業訓練施設の多くは、入所する方法であり、主婦や母親の役割のある人にとって、職業訓練の学習を困難な状態にしている。障害者の職種としては、三療の他にピアノ調律師、コンピューター・プログラマー、クリーニング、電話交換士、機械加工、板金溶接、ミシン縫製などがある。しかし、広島市の住民が障害者になった場合、職業訓練施設は広島市にある県立盲学校か三原市にある聖光学園に入所するかである。さらに三療従事者における障害者の割合は1920年代において90%を占めていたが、健常者の進出によって最近では40%を割り、厳しい労働環境に置かれている。

中途障害者は、現職復帰にはまず生活訓練や歩行訓練が必要であり、さらに新たな職業を持つには、点字の習得が必要となる。職業的自立に向かう学習の保障こそ、生きがいの実現への援助であり、リハビリテーションの目標である。成人期において失明体験をした障害者が職業を持つことは学習によって達成するため、生涯学習社会の役割は大きいといえる。

4) 障害者の学習の意義

まず、学習は、障害者のリハビリテーション過程において、日常生活活動能力の維持・確保を可能とし、生涯にわたる発達の支援、人間としての発達の保障となる。つぎに、たとえ1人で行う学習であったとしても、学習は社会と何らかの交流を行うことが自然と生じる。他者との交流こそが自己を覚醒し、人間的権利の復権 (total restoration of human rights) となり、生涯学習社会の求める相互教育の人間関係が具現化する。

5) 障害者の学習権の保障と生涯学習社会の構築

障害者の学習権の保障は、真に人間としての生き方の育成を目的とする。失明体験は、あらためて人間とは何であるかと自問する状況であり、主体的に自己実現に向かう人間としてあるための学習動機となる。障害者自身の意志に基づく学習が可能となり、新たな目標や意志を育成する。学習は障害者に希望や生きがいをもたらす。

障害者を考慮した生涯学習社会とは、人生途中で障害者になったとしても、どのような学習を行えばよいのかを誰もが知っている社会、お互いの人格や存在価値を尊重する社会であり、障害者が人間らしく生きるためのリハビリテーション過程において、おのずと学習が保障され、対等な関係が生じる社会である。

障害者を考慮した生涯学習社会の構築には、人間の可能性を障害があることで限定しないこと、生涯学習の思想が社会の構成員一人一人に浸透すること、障害者がその人らしく生きるための学習を可能とするシステムを有することを提言する。

6. 本研究の限界と今後の課題

今回調査した障害者は、障害者の会に入会しており、どちらかといえばリハビリテーション状況は良好であり、母集団を代表している人とはいえない。また、研究者自身がデータ収集の用具となっているために面接能力により得られたデータが限定される。さらに後ろ向き調査であるため、体験の美化や省略があると考ええる。

今後は、障害者の状況を多様化して調査していくことや失明告知を受けた時点から新たな学習を行う時点までを調査し、障害者のリハビリテーション過程と学習方法の関連を明きらかにし、障害者における生涯学習の方法論を提言することである。

引用文献

- (1) 斎藤伊都夫・辻功編著『哲学事典』平凡社, 1971, 1301頁
- (2) 仲田直『社会同和教育読本』阿吽社, 1994年, 139頁
- (3) 障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会ら編『障害者の人権20の課題』全国障害者問題研究会出版会, 1995年, 98頁
- (4) 伊藤俊夫『生涯学習の方法』第一法規, 1993, 46頁
- (5) 市川昭午『生涯教育の理論と構造』教育開発研究所, 1981, 95頁
- (6) Peter Jarvis 『Adult and Continung Education Theory and practice』Groom Halm, 1985,181頁

参考文献

- (1) NHK 放送文化研究所編『日本人の学習 成人の学習ニーズをさぐる』第1法規出版, 1990年.
- (2) 内閣総理大臣官房広報室『世論調査報告書 平成4年2月調査 生涯学習に関する世論調査』, 出版年未記入.
- (3) 伊藤俊夫・山本恒夫編著『生涯学習の方法』第一法規出版, 1993年.
- (4) 香川邦生編著『視覚障害教育に携わる方のために』慶応義塾大学出版, 1996年.
- (5) R.J. ハヴィーガースト著 荘司雅子訳『人間の発達課題と教育』玉川大学出版部, 1995年.
- (6) 高柳泰世編『見えない人見えにくい人のリハビリテーション』名古屋大学出版会, 1996年.
- (7) 藤田真一『盲と目あき社会』朝日新聞社, 1982年.
- (8) 広島市『心身障害者総合リハビリテーションのあり方調査報告書』, 1991年.
- (9) 厚生統計協会『国民福祉の動向』, 1995年.

(うえだ きくこ 広島大学医学部保健学科看護学専攻) 1997年10月16日受理

